

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	独立行政法人 大学入試センター
企画名称・テーマ	独立行政法人 大学入試センター 入学者選抜研究機構 第 2 回セミナー 「大学入試を考える ～全入化時代に入学者選抜は必要か～」
開催日＜会場＞	2011 年 10 月 1 日（土）＜日本教育会館＞
参加者所属	教学部 教育開発課

参加報告

10 月 1 日（土）、大学入試センターが主催する第 2 回セミナー「大学入試を考える ～全入化時代に入学者選抜は必要か～」に参加した。

周知の通り、日本の 18 歳人口は 1992 年頃を境に減少傾向にあるにもかかわらず、大学全体の収容定員は増加傾向にあり、需要と供給の視点から見ると「適正な状態」とは言い難い。

また、その不適正な状況は、年々学生募集競争を過熱しており、その結果、各大学は学力測定を課さない、もしくは学力テストを軽視した試験にシフトする傾向が進行している。

本セミナーは、このような日本の現状を踏まえたうえで、市場原理に任せた 1 回の試験成績で判定する入試制度ではなく、今の時代にあった新たな入試制度の提案を主旨として開催された。

発表①「情報技術は入学者選抜を変えるか」＜発表者：土屋俊＞

土屋氏からは ICT を活用した新たな入試制度についての提案がなされた。

この提案は、日本の入学選抜の特徴とも言える学力を重視した選抜を改め、高校生が営んできた 3 年間の学習活動（大学での評定、模擬試験、クラブ活動、資格取得など全て。）を選抜判定材料にするというものである。

この新しい選抜方法は、まず高校生が WEB 上に自分自身の 3 年間の学習活動を登録し、そのデータをもとに大学にアプローチし交渉していく方法である。この選抜方法の利点は、まず高校生の学習達成度という一側面だけで選抜するのではなく、総合的な視点から選抜する事を可能としていること、また、目的意識やモチベーションを確認しながら選抜できる事にある。

18 歳人口が減少し、大学入学へのモチベーションが希薄化している中、受験生との対話（やりとり）の中で、入学者の学習経歴や入学の目的などを確認しながら選抜する事は一定の意味があると感じた。

発表②「高等教育のグローバル化と大学入試」＜発表者：田中義郎＞

続いて田中氏からは、「高等教育のグローバル化と大学入試」というテーマでの報告があった。

高等教育のグローバル化を考える際、マーケットの拡大が必要となり、その結果、入学選抜の国際化が必要となる。

ただし、外国から受験生を受け入れる際には国内の大学が留学生入試などの制度を準備するだけではなく、国際基準に相応した「入学有資格者認定」や「機関移動認定」といったプラットフォームが必要となる。

また、学位についても同様である。学士の学位を保障し国内外の大学間で比較を可能とする尺度も作らなくてはならない。

これからの高等教育を考える際、グローバル化は避けられない条件であり、それに呼応した入試制度や学士の質保証をおこなわなくてはならない。

発表③「全入時代における障害者のための支援技術」＜発表者：上野一彦＞

日本の大学において、ここ数年の間で知的障害や発達障害を抱えて入学してくる学生が増加傾向にあると言われている。

上野氏の報告によると、小学校を対象とした障害を抱える児童数の調査では、ここ数年増加傾向にあり特にLDやADHDといった発達障害の増加が目立っている。

このまま行くと、数年後には大学にも多くの発達生涯を抱えた学生が入学することとなり、大学はその対応を急ぐ必要があるとの指摘がなされた。

また、日本の30年先に行くといわれているアメリカでも発達障害を抱える学生は増加しており、入学選抜においても様々な合理的配慮を施しているという。

日本の入学者選抜においても、支援技術の普及や選抜時の測定能力の明確化、公平性の担保など様々な課題が山積している。

これは、入試だけの問題ではなく入学後の教育や授業運営とも深く関連しており、我々FD担当者もその対応を急がなくてはならない。

以上